

三十八億年の審判

今世紀初頭の歴代内閣を告訴する。

今世紀初頭には、かなりのものが分かっていたにもかかわらず、政治は世論に流され、本来の長期視野に立った政策を怠ってきた。

私たちは「自分たち自身を戒めるため」にも、過去の自国の政府を告訴することを閣議決定した。

花園克也は、自宅の前を右にゆるやかなカーブを描き山へと昇っていく農道の途中から、自宅や黄金色に輝く田んぼや畑を眺めるのが好きである。午前中の四時間ばかりの野良仕事の後のひとときである。頭を垂れる黄金の稲穂は、あと一カ月もすれば刈り入れである。点在する農家や集落の西の先に街のビル群が小さく霞む。

この地方都市に限らず、四十年前から物質文明の象徴たる都市の価値認識は変貌し、居住率も五十%を切る都市が増え、スラム化が問題視されてきた。スラム化したビルの処理問題も国会議員である克也たちの目下の懸案事項である。

三十五年前、根本的な社会生活構造を、工業型から生態系型へ、都市型から田園型へとするべき、いわゆるサステナブル（持続可能な社会）認識が閣議決定され、それに伴うさまざまな新規法案ができ関連法案の改正がなされてきた。二〇四五年のサステナブル認識の閣議決定からの十年間は、一部の投資家や高給を得ていた人たちの中での混乱もあったようだが、ここ十年は教育の成果もあり、ようやく落ち着いてきた。

とはいえ、今から思えば二十世紀末あるいは二十一世紀初頭に、サステナブル認識的な判断を日本政府や国連がしていれば、今の温暖化による大型化した台風による災害や、石油や鉱物資源の枯渇による社会混乱、スラム化したビルが象徴する非循環型構築物や道具類の処理をここまで引きずる

こともなかったと思える。五十年前に最後の二機が稼働を停止した原子力発電による高濃度核廃棄物の処理などは、今後何十年かは、その電気を使用しない我々や、子ども達が管理することとなる。今の我々の基本的な認識は二十世紀、二十一世紀に我々の先祖が平和と発展の便利さを享受したための負の遺産を、できるだけ子孫に残すべきではないという認識で一致している。

現在ようやく八千万人弱となった人口も、あと二千万人減の六千万人までに減らすことで、持続可能な自立した日本社会の存続が可能だと計算できている。かつての資本主義経済を維持した消費人口、そして生産のための労働人口を維持するための無計画な人口増にたよる成長経済の政策は、国土の広さを無視した無謀な政策だったことが検証できている。残念なのはつい四十年前まで、ほとんどの政党の少子化対策が、二〇〇五年の総人口一億二千七百万人からの減少以来、いかに増やすかがテーマになっていたことである。いまから考えると無責任な発想としか考えられない。

四、五百メートル先にある鎮守の森を見ながら、「三年前よりも大きくなったような気がするな。植生、増えたのかな」などと考えているとズボンのポケットに入れた携帯電話が鳴った。同じ県内出身議員の川島からの電話である。二十センチメートル四方の空間モニターを始動させると、やや自信なさげな川島の顔が表示される。

「花園議員。本当に今回の件、可能なんだろうか。自国の政府が過去の自国の政府を訴えるなどということが」

「確かに前代未聞だろうな。しかし、日本国民としては、どこかで始めが必要だろ」

「ただ、あの時代は国民の多くが、発展経済を望んでいたし」

「そう、多くの国民は望んでいた。単にそれを総意とした政府は、長期展望に立った明確な理念を持っていなかった。どう検証しても、あの時代、次の選挙のことしか政治家は考えていなかった。その場しのぎの近視眼的な政策ばかりだろ。多くの研究者は警鐘を鳴らしていたし、一九九七年に

は京都議定書もあった」

「世論は、そのままの経済の発展を望んでいたんじゃないのか？」

「世論のでたらめさは、過去の歴史が証明しているよ。大衆の総意と言うものが、いかに環境を破壊してきたか、文明を滅亡させたのも、個々の欲望のなせるわざ。『共有地の悲劇』を起こさせないためにも政治が必要なはずなんだ。あの時代、学問的には『成長の限界』も書かれて三十年も経過しているよ。そこまで政治家は無知だったのかな」

実際、理解しない政治家もいたのだろうが、「このままでは危ないぞ」と感じていた政治家もいたようである。それでも次の選挙を考えると大衆としての国民のひとり一人を説得するには、社会の成長経済に対する妄信のエネルギーの方が強かった。

「それにしても、自分で自分を訴えるようなものだろ」

川島は五代続いた政治家の家系である。数年前に政界を引退した父親はまだ健在で、先日も週刊誌の記事でサステナブル認識の閣議決定前後の話を

書いていた。父親はともかく祖父は、今回我々に告訴される側の政治家であるため、複雑な気分なのであろう。

「ともかく、告訴することは閣議決定したんだ。じゃ、午後の閣議で」

一方的に電話を切ってしまう。川島自身悪いやつとは思わないが、話がねちっこい。政治家という職業の世襲は、ともすると社会全体を見えなくする。そもそも親子といえども向き不向きはある。政治家の世襲という風習が、あの時代の閉塞的な政治システムを作ってしまったとしか思えない面もあるのだ。以前調べてみたが、あの時代の政治家のほとんどが、法学部と経済学部の出身という、極端な偏りを示していたのには驚いたものだ。

先の大戦終了からの百年間、日本国民の生活基盤の多くが資本主義経済で作られたモノサシで計測されていた。いや、地球全体が地域性を無視した画一化されたモノサシで計測されてしまっていた。政治家に経済学部出身者が多いというのもうなずける。しかしそのモノサシは欠陥品だった。人口が延々と増え続いても、石油や鉱物資源はどこから湧いて出てくる、な

どという一つしかない地球という器を無視した、子どもでも疑問を感じる、非常識なモノサシだった。

農道を自宅へと下りながら、側溝に溜まった枯葉などを取り除いてやる。この側溝や農業用水路のほとんどが、五十年前までセメントで固められていた。農薬使用の問題も重なり多くの生物種が滅亡していった。サステナブル認識以降の考え方は「循環」と「共生」を人類だけではなく、他の生物種との関係においても適応可能なかぎり適応させながら生活することとなっている。人間とて生態系の一部であることに変わりない。実際三十五億年前、酸素放出型の光合成をするシアノバクテリアなどによって、今の地球の大气バランスが作られたことも研究されている。地球の三十八億年の生命の歴史の中で、人類は生態系のトップに位置づけられている。黄金に光る稲穂のように、生物種の頂点に立つ人類だからこそ、謙虚に頭を垂れるべきであろう。

自宅の縁側で孫の太郎が、いまやおばあちゃんと呼ばれるのにも慣れた洋子と大豆の実を取り出している。まだ二歳の太郎にも、遊びながらも家族の一員として働くことを理解できる環境にしたい。おばあちゃんのやることをまねる。それが家族の夕飯に並ぶ。家族と一緒に自分が作った食材や、それを使った食事の準備に関わったことへの喜びが、働くことの根幹にあり、それが新たな生きることの喜びにもなる。

午後、自宅のコンピュータシステムから政府のメインコンピュータへアクセスする。閣議が開かれる。メインとなった議題は告訴対象の政府である。小泉、安倍、福田、麻生の四政権とするか、「今世紀初頭の政権」と抽象的な表現とするかで意見は分かれた。議員によっては、もう一度、人類が農耕という形で自然を管理しはじめた一万年からの検証が必要ではないかとの意見もあったが、我々自身が自戒するという面では、あまりにも漠としたイメージに包まれるという意味で却下された。

危機管理的な面も含め、現在では政府機能も各地に分散している。労働環境も変わり、国会議員の七割は、花園と同様に自宅からの閣議参加で、午

前中と夕方以降は野良仕事である。「自分たちの食べる食糧は自分たちで作る」が生活の基本となっている。そのため現在、日本の食糧自給率はようやく九割に達した。自宅で自分たちや親戚が食べる食糧の生産はビジネスベースでの換算はなされない。人が生存する行為としての労働ととらえられ、そのための地代や固定資産税も安価に設定してある。そして食糧以外の現金収入のためだけにビジネスベースの労働をすることが定着しつつある。克也の場合は国会議員としての労働は一日四時間で充分である。もちろん食糧を自給しないで、かつてのようにフルにビジネス労働を選択することも可能ではある。

今世紀初頭の日本では、毎年二万人の自殺者があったという。現在、西暦二〇八〇年、年間の自殺者数は千人に満たない。ようやく人類が自ら生物であることを自覚しつつある。

(2012.11.28 『二十八億年の審判』木部晃二)